

電子顕微鏡中国の旅—内蒙古自治区



随筆

橋本初次郎*

はじめに

1978年10月、当時日本電子顕微鏡学会会長をしていた私は、中国冶金工業部の副部長（副大臣）陸達氏の招きで初めて中国へ渡り、副会長の田岡教授と共に電子顕微鏡学の金属学への応用についての講演を、北京、上海、広州の3カ所で、夫々3～4日間に亘り行った。このことがきっかけで、その翌年日本電子顕微鏡学会創立30周年式典に中国より6人の学者を招くことになり、その翌年の1980年の中国電子顕微鏡学会成立式に招かれて出席することになった。この時中国電顕学会の副会長になられた柯後北京科技大学副学長と郭可信中国金属研究所教授の申し出により、中国の電顕学の発展に協力することとなり、手始めにその翌年日中電顕セミナーを開催した。日本から20名、中国から30名の小さな会であったが、極めて有効な成果が上り、茅誠司先生や学振の協力もあり隔年に開催することとなった。この会の間の年には中国国内の学会が開かれ、それにも出席を要望されて毎年中国へ出かけることになった。その後中国の4つの大学研究所から名誉教授の称号が与えられ、それらを訪ね講義をすることもあり、中国とは極めて密接な関係をもつこととなった。このため中国の各地、北は内蒙古自治区から南西のビルマに近い雲南省の西双版纳（シーサンパンナ）に到る40を越す土地を訪ね、学者のみならず色々の分野の人、各種民族の人と交流することができた。ここでは内蒙古自治区を訪ねたときの私の体験をのべたい。

*橋本初次郎 (Hatsujiro HASHIMOTO), 大阪大学工学部名誉教授, 岡山理科大学, 工学部機械学科, 教授, 分析センター所長, 理学博士, 電子顕微鏡材料科学

包頭(パオトウ)市

唐の詩人李白が「君見ずや、黄河の水天上より来り、奔流し海に到りて復たかえらざるを…」と歌った黄河は、青海省の奥地に源を発し、蘭州より北上し内蒙古自治区に入り、包頭の南にくると、もと来た道を引返すように南下して万里の長城をつき切って西安などの歴史地帯のある陝西省へ入り込んで、やっと東へ折れまがって渤海に注ぐ。内蒙古に水を供給するために往復している様にみえる。包頭は以前は黄河水運の基地として栄えたとのことであるが、今は北にある白雲鄂博（パイウンオボ）にある中国地質学者により発見された鉱山からの鉄鉱石と東の大青山の石炭と豊かな黄河の水を用いて大製鉄所が作られ、開放当時7万人だった人口が今は、157万人となり、鞍山、武漢と共に中国を代表する三大製鉄都市になり、草原鋼城とも呼ばれている。

この地で1986年8月2日と3日に第4回の中国電顕学会議が開かれた。7月30日北京で午後40分発の汽車にのり翌朝9時40分包頭の駅についた。この時遼東半島の砬岩（ユウエン）で採れた約1米の高さの良質の玉（ぎょく）に、沈陽の玉器工場で「中国電子顕微鏡学会成立記念」と刻み込んでもらった碑を運び込んだ。形の設計には京都芸大の山崎脩教授の助力を得、玉石の購入や作製には会長の郭教授、向鵬挙事務総長、関若男博士らの協力を得たが、宝石の様に青緑に透き通る色を湛えた地肌金文字を彫り込んだ碑は気品の高いものであった。これは駅に迎えに来た数人の若い学者達により会場に運ばれた。同行の山崎教授、東レの吉村氏（蒙古の羊毛を中心とする繊維研究に電顕がどの様に使えるかを発表するため招待された）と一緒に50米程の広い鋼鉄大街を通り宿舎の青山宴館に

入った。ここは第1号熔鋳炉をスタートさせたソ連技術者の宿泊所として作られたもので、広い敷地に立つがっしりした建物である。いくつかの別館もあり美しい花壇のある庭がその間をつなぎ、一歩この中に入ると製鉄所の街であることを忘れさせる。空気は澄み、涼しく日本の夏からは想像できない爽やかさである。

五当召(ウータンチャオ)

到着した日の午後包頭市の北東70kmの所にある内蒙古最大のラマ教寺院五当召を訪ねることにして学会の用意してくれた自動車にのり出かける。20分程すると黄河の支流に沿って山に上って行くが、道は河の中に入って、流れを横切ったり、河の中で流れに沿って走ったりしているうちに水は涸れ、石ころばかりの河の中をはげしく揺られ乍ら約2時間。一体どこへつれて行くのかと少々不安になり出した頃、河の(道路の)正面に忽然と華かな色彩に飾られたチベット式建築の大寺院が現れ、道路はそこで終わった。六つの大殿、三つの活仏府、一つの陵堂250余の部屋をもつ房舎は小高い丘の斜面を覆い、まわりに山を控えて壮大な構えをみせていた。その出現は如何にも唐突で、桃源境とはこんな所を云うのかと思わせるものがあった。その色と形は本でみたチベットの拉薩(ラサ)にあるポラタ宮を思い起させた。通訳を通してきた僧侶の説明によると清の康熙帝年間(1662~1723)にチベットへ徒歩で行き、修業をして又徒歩で帰って来た僧が建てたものと言う。この山奥に壮大な寺院を作り沢山の經典を持込んだ僧侶や信者の姿は想像することさえむつかしい。ここは学問の寺として多数の僧を養成し、かつては1200人以上の僧が勉強していたとの事である。今は約30人が伝統の顕教、密教、薬学などの学問を継承し、きびしい勉強をつづけているとのことで、マニ法会には7日間昼夜を徹して読経をつづけるとのことであった。又1960年迄は活仏様がおられたとの事で、歴代の骨灰も安置されていた。私がネパールでみた活仏は年若い女性であったが、ここは男性で28歳で逝去した最後の活仏の写真が飾ってあった。

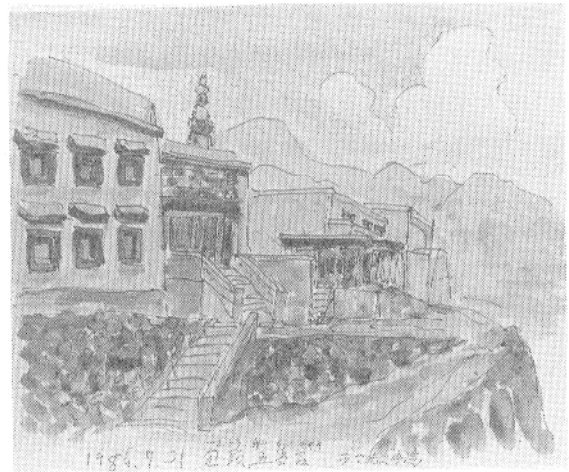


図1. 内蒙古自治区最大のラマ寺五当召(ウータンチャオ)の寺院の一隅。(スケッチ)

壮大な建物の全景は横の山の上にも上らないとカメラに入らない。時間がないのであきらめて、せめてもとスケッチブックに建物の一隅をかきとめた。(第1図)

成吉思汗(ジンギスカン)の陵

包頭の北は陰山山脈が控えているが南にはオールドス台地が広がる。このオールドスの中南部で包頭より470kmの伊金霍洛(イジンホロ)旗県にジンギスカンの陵があると言うので、そこを訪ねるため、学会参加者はバス2台に分乗して8月1日朝7時半に包頭を出発した。ここはまだ開放区になっていないのでパスポートを携行せよとのことであった。無限に広がる草原は黄河を渡るとなだらかな斜面となり、いつか台地の上に出る。人の気配は少なくなり、まわりは黄土が雨で浸蝕されて鋭く深い谷になっている。浸蝕されて大きくなった谷が道路の近く迄迫っている所もある。皆黄河に流れ込んでいるのだ。空は紺青に澄み渡り、自動車の前方には黒いアスファルトの道が、草原の中にどこまでもつづいている。人家はもうない。でも馬や驢馬に引かれて進む人を時折追越し又すれ違う。どこへ何をしに行くのか。一日かかっても次の村まで行けそうにないと思えるのだが……。快速でバスを走らせて4時間余りして目指す陵についた。広大ななだらかな斜面に作られた陵は、入口の高い石柱と梁で作られた門をくぐると、遙か彼方に黄金色の天蓋がみえる。長い石畳の道を歩

いて近づいた陵は26米の高さの正殿と左右の副殿より成り、これが廊下でつながれていた。正殿には5米位の高さの椅子にかけているジンギス汗の塑像（山崎教授の話ではコンクリート製）があり、副殿には彼と夫人の靈柩が彼の用いたと同じ形の包（パオ）の中に収められてあり、彼の用いた馬の鞍と祈りをささげた槍の穂先が祀ってあった。正殿の奥には「一代之天驕」とかいた赤や黄や白の吹流しの布が垂らしてあった。「天驕」の意味を会長の郭教授に質問したら紙片に「天之驕子」とかいてくれた。ジンギス汗のことである。廊下にはジンギス汗の一代記が近代的な画法で全面に描いてあり、8歳の時父テムジンを毒殺した敵の追手を馬車につんだ羊毛の中にかくれてのがれ、13歳で大将になり45歳では全モンゴルを平定し、西城を征服して全国に農耕や学問をひろめたことなど、子供にも楽しめる絵があった。建物の屋根は黄金色のタイルを用いてイスラム風のドームを作り、そこへ藍色タイルを雲文としてはめ込み、その模様は彼が用いた包（パオ）の形にしてあった。そのドームは8角形の瓦屋根が支えていて、8角形の壁は黄色に、柱や扉は朱色に派手な色彩が施されていた。(図2)ユーラシア大陸を席卷した雄大な人物の墓としてどんな陵が現れるかと期待していた私には、少なからず失望感があった。何か物足りなく侘しいのである。

遊牧民のモンゴル族は高塚形式の墓を作らない。話によるとジンギス汗の死後、外モンゴル



図2. イジンホローにあるジンギス汗の陵。
(スケッチ)

にあった墓は、埋葬後馬をのりまわして平地にし、30里程の範囲に矢を挿して垣を作り騎馬兵が巡邏して守っていたと言う。元の崩壊後明の時代にこの墓を守っていた人が墓と一緒にこの地に移されたと云う。オールドスと言うこの地方の語はモンゴル語で「宮殿」と言う意味であるそうなる。

内部を一巡して再び彼の塑像の前に立ち、騎馬軍団を怒濤の様に走らせて、各地を転戦した様子を想像して、この陵のイメージアップに努めた。それでも何か物足りないものを感じ乍ら、本殿から一歩外へ出たら、抜ける様な青空と白い雲、限りなく広がる蒙古草原が目にとび込んで来た。そしてこの時、建物をみたときの侘しい感は一掃された。この空と草原こそがジンギス汗の陵なのだ、ここにある建物はそれをみる為の展望台なのだと決めた。この自然こそ壮大な生き方をした彼の真の墓なのだ。(図3) 時間を気にしなごらいそいでスケッチブックを開き(図2)又下手な絶句をかきつけた。

黄河遠上到草原 黄河遠く上り草原に到る
蒙古廣野碧空連 蒙古の広野碧空つらなる
黄金天蓋思汗陵 黄金の天蓋 思汗の陵
天驕魂魄照萬年 天驕の魂魄 萬年を照す
帰途黄河の大きな支流河にある响砂湾に立ちよる。河がカーブする所に百米以上の高さに堆積した黄沙が延々と4km以上もつづく見事なものだ。人々は車を下りて頂上へ上った。私は砂を少々すくって紙につつんでポケットに入れた。電子顕微鏡で日本へ帰ったら一度のぞいてみよう。



図3. ジンギス汗陵の正殿前より見た蒙古草原は抜けるような青空の下に無限に広がっていた。

電子顕微鏡学会議と包頭金属研究所

翌日8月2日朝8時より包頭の科学技術庁科学技術委員会本部のある科技人員の家と呼ばれるビルの大講堂に約300人の参加者を集めて行われた。我々一行の他に北大の竹山太郎名誉教授、米国ペンシルバニア大学のT. T. Tsong(鄭天佐)教授、スエーデンのNordin博士、日本電子の鈴木氏らの国外参加者を含めて開会式が開かれた。

会長の郭可信教授の開会挨拶について、私を学会の第一号名誉会員にしたいと証書を壇上で渡された。この時沈陽から持参した学会成立記念の玉碑を学会に贈り、この碑の側面にかかれてある、学会成立式が開かれた成都で作ったお祝いの漢詩を披露した。

遥望白帝彩雲間 遥に望む白帝(城)は彩雲の間

峨眉秋色到絶嶺 峨眉(山)の秋色、絶嶺に到る

回首碩儒満錦城 首を回せば碩儒錦城に満つ
将見丞相旗再現 将に見る丞相旗の再現するを。

これは将に、劉備や孔明、関羽ら諸将英雄が成都(錦城又は錦官城)に集って蜀の国を創った1760年前の有様が再現している様だとのべたものである。そして実際にこれから20年、50年、100年と経つにつれて、後代の人々は皆さんを、電顕学を中国に確立した現代の英雄と見做すでしょうと話した。

ついで包頭市の教育委員会会長の劉鳳鳴氏があいさつし、只今漢詩を作ったからと

夏到鹿城似初秋 夏鹿城に到り初秋に似たり
繁花錦簇麗人頭 繁花錦簇、麗人の頭
日照当空不觉暑 日照空に当りて暑さを覚えず

室外風光任君遊 室外の風光、君の遊に任ずの詩を披露して歓迎の意を現された。鹿城は包頭のことで、ここには300年程前には鹿の群が行き来する泉の湧き出る森があったと伝えられ、昔モンゴル族はここを包克図(パオトク)(鹿の住む土地)とよんでいたと言う。夏は初秋の様に涼しく、沢山の花が錦のようにむらがり咲い

て美女の頭がならんでいる様にみえ、室外で風光を觀賞するのに適しているので包頭の夏を楽しんで下さいと。

このあと郭教授と私が夫々1時間余りの講演をして開会式を終わり、午後の一般セッションに移った。

翌日の3日は包頭の金属研究所を訪ねた。3つの高炉と11の工場をもち、アメリカ、ソ連でしか生産されない1mあたり75kgのレールを作り鉍石から製品迄の一貫作業をしている包頭製鋼所の頭脳とも言える所で、その設備の近代的なのは当然ながら、この蒙古の奥地にこれ程の設備をよく整えたと云う感を受けた。材料分析のための電子線関連機器を例としてあげると日本電子の2000EX(200kV)電顕、日立のHU-11(100kV)電顕、理学電機のX線回折装置、フィリップスのオージェSEM、パーキンエルマーのESCA、ケンブリッジインスツルメントの像解析システム等があった。参観に同行したT. Tsong教授と電顕関係の技術者と一緒に正面玄関で写真をとって辞去する。

黄河水利に関する本によればモンゴル族の間には次の様な伝説があったと云う。「この草原の上には鉄箱の宝の山があり、もし誰かがこの山を見出し、その山を開く鍵を探し出すことができれば、使っても使い切れない鋼鉄を得ることができる」と。包頭の白雲鄂博(パイウンオボ)山は正にそれであったが、現在は更に稀土類元素が産出することが見出され、竹山教授の話によれば世界の総産出量の80%がここから産出さ



図4. パオトウの金属研究所の前で電顕関係所員と記念撮影。前列かばんをもつ人はペンシルバニア大学のTsong教授。その左が筆者。

れ、日本にも輸出されていると。稀土類元素はカラーTVの鮮明な発色に用いられたり、鉄や非鉄合金に添加されて、機械的性質、特に靱性高温クリープ、熱間加工性の向上などの他に耐酸化性、耐腐蝕性の増加などがあり、極めて重要な材料である。この発見により包頭を中心とする内蒙古は更に一段と飛躍するだろうと云う印象をうけた。

呼和浩特(フホホト)と草原の包(パオ)

3日昼食を済ますと早々に160km、東の内蒙古自治区の区都のフホホト市に向った。市の教育局長の阿栄(アーロン)さんに逢い、その案内で内蒙古大学を訪ねるためだ。包頭の科学委員会の王国義さんと北京鋼鉄学院(現科技大学)の袁逸講師が車に同乗して通訳と案内をしてくれた。屏風のように立ちの陰山山脈のふもとを一路、広い草原に群をなす羊や牛の群を眺めつつ走る。途中で美岱召(メータイチャオ)寿靈寺を訪ねた。入口の楼門の前に車を止めて中に

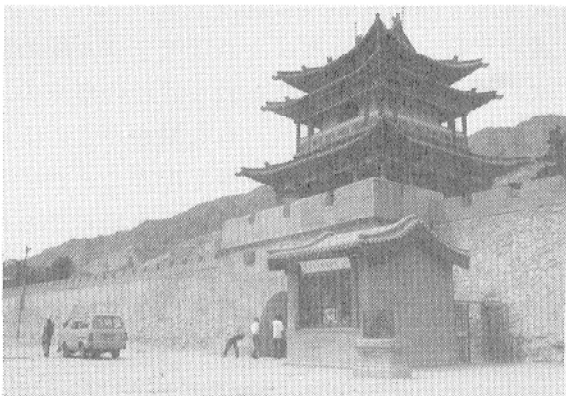


図5. パオトウ—フホホト間にあるラマ寺美岱召(メータイチャオ)の楼門。陰山山脈のふもとにある。



図6. 内蒙古自治区の政庁があるフホホト市人民政府の建物

入る。(図5) 大きな城壁に囲まれた古いラマ寺で、漢族の娘がモンゴル族と結婚してここに来たのを記念して建てたとのことで、包頭で訪ねた五当召(ウータンチャオ)と同じく内部は青、赤、黄の顔料で画いた、宇宙、天国、地獄風の絵が壁面一杯に画いてある。裏の陰山山脈の中腹には点々と歴代の修業僧の墓がみられた。更に延々とドライブをつづけ夕方5時近く陰山三大主峰の1つ大青山のふもとに開けた緑の多い町フホホトにつく。何人かの人に道をきいて、5階建ての呼和浩特市人民政府とかいた門札のかかる政庁についた。今日は日曜日で職員は不在だが、以前に私の出した手紙により、阿栄さんが先刻まで待っておられたと宿直の職員が話してくれて電話連絡してくれた。暫くして日本語の非常に上手な索岳勤札布(ソモルジャブ)さんをつれて来てくれた。草原の包(パオ)に泊っ

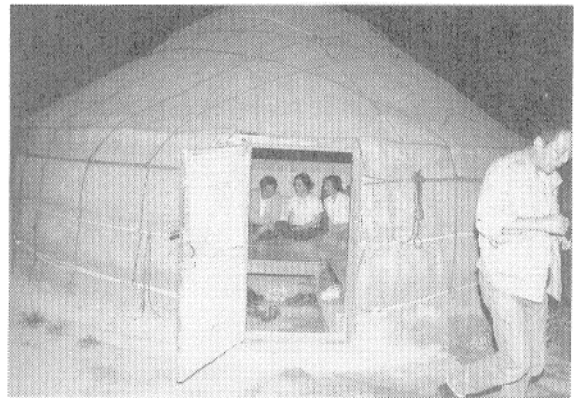


図7. ウラントガーのパオに泊る。



図8. 蒙古草原での食事の途中。

て草原の夜を楽しんで頂きましょうと、日の暮れるのを気にしながら車で北上し約2時間、武川市を經由して黄土高原へ上って行った。両側の黄土は実に美しく耕され日本の山畑と見間違える位に、そばが整列して植えてあった。人家もみえないこの土地へ坂を上って来て耕作するその苦労は大変なもののように思えたが、人々は勤勉でこつこつと働き耕すのだとのこと。そばの他になたね、大麦を作るのだとか。烏蘭図格（ウラントガー）草原についた頃、日も暮れて薄暮の中で、今晚泊る包（パオ）（図7）をみて招待所の食堂に入る。蒙古の高級料理の骨つきの羊の乾燥肉を焼いたもの、炒めた粟を茶わんに入れそれに馬乳をそそいで飲むものなどが出た。珍しく又空腹なので手を出したが、どうも私の胃には負担になりそうだったので消化剤の助けを借りた。包に入って暫くソモルジャブさんの蒙古の話をきいた後、みんな足を中心の方向に向けて眠った。外は何の物音もきこえない静寂そのもの。雨が降り、包の屋根にあたる音が蒙古草原の夜の静けさをさそつた。

次の朝6時半に起き車で20分程、まだ明け切らぬ草原を走り、小高い丘の上にある敖包（オボウ）を訪ねる。直経8米位で石を3段に3米位につみ上げその上に棒を立てたものを中心にして、先端に3本槍の穂先をもつ棒を4本立て、それらを紐でつないでとりかこんである。前には供物、線香、燈明を夫々上げる石が3つおいである。更にこれを中心にして左右に翼の様に一列に10米おき位に、1米位の高さの石積みが作ってある。農曆5月13日になると那達慕（ナーダム）と云うお祭をし、ここへ草原の彼方から何百人の人が集り、すもうや競馬に興ずるのだと。広い草原の中の唯一の建造物、簡単ではあるが何か靈気を感じさせる。祈りは石をもって来て積上げることだとソモルジャブさんが説明してくれる。草原の中でここに積んである様な大きな石を拾うのはかなりむづかしい。小さな石をやっと1つみつけて私もつみ上げた。

食事後、蒙古へ来て馬にのって草原を走らなくては本当の体験をしたことにならないと、訪問者に馬を貸す所へ行く。小さい馬で、ジンギス汗に侵攻されたヨーロッパ人が「ネズミの様な馬」と形容したその馬だ。蒙古の騎馬服を着た二人の青年の一人が馬を下りて私に馬を借してくれた。もう一人の青年は私の馬のそばにならんで馬を走らせてくれた。少年の頃田舎で数回裸馬にのって走った経験をもつ私は少しスピードを上げようと馬上ではづみをつけるのだが一向に云うことをきかず、隣の馬のスピードに合わせている。これは観光客用に訓練された早く走らない馬だと観念して一まわりして（図9）馬を下りた。所がである。先刻の青年がのり手綱を上げ一声ハーッと叫ぶと一瞬にして猛烈なスピードで駆け出し、またたく間に小さくなって地平線の彼方にとけ込んでしまった。あと更に2頭が追跡し小さくなり、それらが一かたまりになると向きをかえ4頭が私達の方へ怒濤の如き勢いで押しよせてくる。あっと思う間に私達のそばを地響を立てて風のように通り過ぎて又彼方に小さくなって地平に溶け込んでしまった。もし私が鞭でたたいたり、足で腹を強く叩いたりして走らせていたら、きっと疾走する馬から

な馬」と形容したその馬だ。蒙古の騎馬服を着た二人の青年の一人が馬を下りて私に馬を借してくれた。もう一人の青年は私の馬のそばにならんで馬を走らせてくれた。少年の頃田舎で数回裸馬にのって走った経験をもつ私は少しスピードを上げようと馬上ではづみをつけるのだが一向に云うことをきかず、隣の馬のスピードに合わせている。これは観光客用に訓練された早く走らない馬だと観念して一まわりして（図9）馬を下りた。所がである。先刻の青年がのり手綱を上げ一声ハーッと叫ぶと一瞬にして猛烈なスピードで駆け出し、またたく間に小さくなって地平線の彼方にとけ込んでしまった。あと更に2頭が追跡し小さくなり、それらが一かたまりになると向きをかえ4頭が私達の方へ怒濤の如き勢いで押しよせてくる。あっと思う間に私達のそばを地響を立てて風のように通り過ぎて又彼方に小さくなって地平に溶け込んでしまった。もし私が鞭でたたいたり、足で腹を強く叩いたりして走らせていたら、きっと疾走する馬から



図9. 蒙古草原で蒙古馬（ジンギス汗軍団の馬の子孫）にのる。



図10. 王昭君の墓の前で、左は教育局長の阿栄さん。右端は日本語通訳のソモルジャブさん。

ふり落されるか草原の彼方に迷子になっていたに違いない。でもよい経験をした。

草原での時間を惜しみつつ再び車でフホホトに帰り五塔寺と王昭君の墓を訪ねた。

王昭君の墓

王昭君はよく知られている様に漢と匈奴の間に行われた民族間の激しい戦いの中で和平のためのきずなとして匈奴の王に嫁した女性である。

馬に上りて紅頬を啼く

今日は漢宮の人

明朝は胡地の妾

と李白は昭君の出発の日の悲しみをのべ、白楽天、石崇などの有名な長編の詩の他に多数の詩や戯曲があり、又日本でも源氏物語、太平記、謡曲にも出て、悲劇の女性になっている。私は王昭君の墓と云われる小高い丘(図10)にのぼり、その上に立つ亭より一面の平原を見渡して語りつがれている物語は少し歪がかかり過ぎているのではないかと思った。(王昭君の墓は包頭の近くにもあるとのことであったが、これも小高い丘になっているとのことであった。)土をもち上げた塚の形の墓を王でさえ作らない匈奴が、王昭君のために草原の土を集めて漢民族のしきたりの墓を作ったのだとすると、彼女は匈奴の王家の中でも漢民族のしきたり通りに振舞い、それを許されて、かなり楽しい生活をしていたのではないかと思った。確かに漢王のお召しを待っていた宮女が、言葉も通じず風俗も習慣も異なる遙かなる国に嫁して行くその心細さは大変なものであったであろう。しかし出発にあたり「怨詩」として知られる見事な詩を作っていることからわかるように、極めて賢明な女性であったと思う。そして匈奴王呼韓邪単于(こかんやぜんう)もはげしかった匈奴の内部抗争を抑えて統一し、又漢とも和平を結ぶ極めて賢明な王であったろうと思う。互に相手を深く愛し、又臣下や再婚した長子からも敬愛されて、充分満ち足りた生活をしていたのではないかと思う。そのため「委食を得ると雖も心に徊徨する有り」と云う漢王朝の宮女にはもう一度なりたいとは思わなかったのではないかと思った。彼女の蒙古行きは、夫や息子や父を戦いの中に失っ

たかもしれない打ちつづく戦乱を止めさせたもので、人道的にも高く賞讃されるべきものであろうと思ひ、又この大きな墓もその行為にふさわしいものであると思ったことだった。

内 蒙 古 大 学

このあと私は現在勤めている岡山理科大学と姉妹校関係にある内蒙古大学を訪ねた。山崎教授は博物館員のこの地の彫刻家、張恒さんと専門の彫刻について懇談し、吉村氏は羊毛工場の研究所で羊毛の研究の話、日本の人工繊維の研究や製造の現状について討論した。

大学では大学校長の方天旗教授、電子系主任の郭廣然教授、周講師、他に物理系化学系の教授ら数名の人々から学長室で話をきいた。この大学は1957年の創設で国務委員副総理の烏蘭夫が校長を兼任し北京大学、復旦大学より著名教授を招き発足したが、急速に規模を大きくして現在、蒙古語文学系、漢語文学系、歴史系、哲学系等と共に数学、物理、化学、生物、電子等の系が合計12あり、外語系には英語科と日語科があり、文学と歴史学は重要で蒙古語文研究所、蒙古史研究所には外人学者も滞在して研究していると。ここには自然資源研究所とか、稀土類元素研究部、草原生態研究部など5研究所と13研究室(部)があり学生は2500人余、博士修士100人余、専科生、講修生、夜間大学生ら併せて800人余りとのことであった。大学は丁度夏休みに入っていて学生は不在、又教授や職員達も夫々郷里に帰ったり、又旅行中と云うことで学内は閑散としていたが、出席の教授達から各学科の授業内容や研究内容設備などについて話をきき、又求められるままに私見を申しのべた。且つてここを訪ねた岡山理大の職員より、私を知っている電顕学者がいたときいたので、逢いたいと思ったが不在で果せなかった。研究室や設備などをみせてほしいと云う私の希望で電顕室など見学できたが大部分の部屋は鍵をもった責任教授が旅行中であけられないとのことであった。

蒙古の夏は快適で、北京や上海に郷里のある人々には帰郷しない方がよい様に思えたが、長い寒さの期間を耐えて生きぬくためにはとても

大切なもので、研究どころではないと言うのが本音ではないかと思った。然し案内と通訳をしてくれた講師の人は、勉強したいので帰郷しないと話していた。

その夜は教育局長の阿栄さんの招待で宿舎の新城飯店の特別室で、岡山へ来られたことのあるフホト第二中学校長の劉国仁さん、張恒さんらともごちそうを頂き乍ら歓談することができた。ホテルで一泊して翌朝フホトを辞去し大同經由で雲崗石窟を見学して北京へ帰った。1925年前の北魏の時代より数十年をかけて彫られた3万1千体余りの石仏は、その17mの大きさのものから数cmの小ささのものまでであると言うスケールのもののみでなく、彫られた像の種類、表情にも強い印象を受け、途中下車によ

る約2時間程の見学であったが、往時の中国文化芸術の大きさと深さに感動したことだった。

あ と が き

蒙古滞在中、郭可信会長を始めとする中国電頭学会の人々、劉鳳鳴副市長を始めとする包頭市の政治局、科学委員会、科技協会の人々、阿栄教育局長を始めとするフホト市の人々や内蒙古大学の人々の好意により、モンゴリアンと呼ばれる日本人や中国人を含む膨大な人種のふるさと蒙古に対して、何となくもっていた古いイメージとは異なる近代化の進む蒙古を知ることができた。まだかき残したことは沢山あるが、紙数も大幅に超過したので、上記の人々に感謝しつつ擱筆する。

